

氏名(本籍)	金 熙 哲 (韓 国)
学位の種類	博士 (教育学)
学位記番号	博 甲 第 1,047 号
学位授与年月日	平成 4 年 11 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当
審査研究科	心身障害学 研究科
学位論文題目	韓国における肢体不自由生徒の進路発達に関する研究
主 査	筑波大学教授 三 澤 義 一
副 査	筑波大学教授 中 司 利 一
副 査	筑波大学教授 中 野 良 顯
副 査	筑波大学教授 松 原 達 哉

論 文 の 要 旨

本研究は、韓国における肢体不自由生徒の進路発達の様相を、包括的にとらえて、それらに影響を及ぼす諸要因を検討して、進路指導の計画と実践への基礎的な知見を得ることを目的としたものである。

進路発達の側面を進路意識の発達過程と、進路決定の過程の両面からとらえて考案した。まず、序論では、進路指導の歴史と理論、その意義と性格、アメリカ及び韓国などにおける研究動向に触れ、一般的な立場から、障害児の問題へと発展を試みた。

本論は 6 章にわたって構成され、第 1 章から第 3 章では、調査研究に基づき、肢体不自由児の進路意識の発達過程を、第 4 章から第 6 章では、進路決定過程及びそれに影響する要因の分析や、学校卒業後の肢体不自由児の進路状況に関する研究について述べている。

1) 進路意識の成熟

韓国の肢体不自由学校、小・中・高等部の児童・生徒 205 名を対象として、進路意識の成熟度尺度により、担任教師に評定を依頼した。その結果、身体障害の軽・重と進路意識の成熟とは関係が薄い反面、年齢及び知能程度と進路意識の成熟とは、強い関連性が示され、予想された仮定を実証することができた。

また、進路意識の成熟に影響する要因については、多次元的なものが考えられるが、とりわけ適性・性格の理解といった、いわゆる自己理解要因が最も大きな影響を及ぼしていることが明らかになった。さらに、障害の状態、知能程度といった個人特性要因や養育態度、啓発的経験の機会などの環境的要因もかなり大きな影響を及ぼしていることが明らかにされた。

2) 進路意識の検討

進路意識を勤労観と進路希望との関係についてとらえ、それぞれの一般的傾向や性別、年齢、障害程度、知能程度との関連について、中学部、高等部生徒125名を対象とした調査の結果、労働の意義を実利的にとらえる生徒が最も多く、社会的・倫理的な意味合いでとらえる生徒は僅かしか見られなかった。また、性別では、男子は女子に比較して、実利的価値志向にウェイトをおき、女子は自己実現的価値志向に傾いている傾向が認められた。さらに、発達の的に調べると、高等部においては、より現実的になっていく傾向が見られた。

3) 進路決定過程

進路決定動機及び進路決定・未決定の原因帰属に焦点を当てて、質問紙法と面接法との併用により、高等部生徒60名について調べた結果、進路決定動機は、自己実現、現実考慮、大勢順応の3つのタイプに大別されたが、その中では主体的な進路決定能力の不足を示す大勢順応タイプに、多くの生徒が該当することが明らかにされた。特に、大勢順応タイプに含まれる生徒には、障害程度が中度、学業成績が下位圏内にある生徒、障害受容が不良の生徒、進路意識の成熟度が低い生徒などが多く認められた。

4) 進路決定の影響要因

進路決定にどんな要因が影響を及ぼすかについて高等部生徒48名を対象に、数量化II類を用いて分析した結果、「障害受容が不良であること」、「進路について親と話す頻度が少ないこと」、「進路意識の成熟度が低いこと」などが、進路未決定に強く作用していることが明らかになった。また生徒に対する人的影響源、たとえば、親、教師、友人との関係については、会話頻度、会話の仕方、会話の希望などの分析の結果、友人とは進路をめぐる活発な相互作用が見られたが、教師とは不十分な相互作用しか行われていないことが特徴的で、しかも、友人、教師、親との会話内容にかなり質的相違が認められた。

5) 学校卒業後の進路状況をめぐる実態

肢体不自由生徒の進路状況と、それを取り巻く諸要因を検討した。特に、高等部卒業生においては、大多数が一般就労を希望していたにもかかわらず、就職率は低く、進路希望と進路実態とは不一致のケースが目立っていた。在学中の教師との関係や、本人の障害程度、知能程度などとの関係を検討した結果、障害程度が軽度で、知的に問題の少ないケースでは教師との活発な相互作用があった反面、知的に問題のあるケースや卒業後施設へと進んだケースでは、在学中の教師との相互作用が不十分であることも指摘されていた。担任教師が経験する進路指導上の困難点として、進路情報の不足、職種の幅の狭さ、家族の協力関係の問題などが指摘された。

審 査 の 要 旨

日本やアメリカにおいては、肢体不自由児の進路発達（職業発達）をめぐる研究は、これまでにいくつか散見されるが、韓国におけるこの種の研究は、これまでにその例が少なく、この意味で

は、本論文は斬新性をもっている。

さらに、肢体不自由児の進路意識の成熟や、それに伴う要因の分析、進路決定過程の諸要因などについて詳細な検討を行い、その特徴や問題点などについて深く掘り下げて究明した努力は、十分に評価されてよいと考えられる。

進路問題は、言うまでもなく、本人側の主体的要因と、本人を取り巻くさまざまな環境的要因、指導体制、社会的諸条件などが複雑に絡み合って提起される複合的な要因によって支配されているものである。そうした実態の究明は、単一の方法論のみで追うことは、かなり難しいことであるが、本論文は理論的にも実証的にも、一つのまとまった成果を得ているとみなされる。細部については、なお究明の不徹底な面も認められるので、今後さらに掘り下げて深い研究を行うとともに、進路発達（職業発達）に関する諸理論、方法論などに関する検討を重ね、この分野の研究の前進に、一層寄与するよう期待される。

よって、本論文は博士（教育学）に値すると判定された。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。